

平成 21 年 4 月 21 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18720059

研究課題名（和文）日本文学における琴学史の基礎的研究

研究課題名（英文）A basically research of the Qin' s history in Japanese literature

研究代表者

原 豊二（HARA TOYOJI）

米子工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：50311064

研究成果の概要：楽器や楽技としての七絃琴の古代での受容は極めて限定的であったが、日本文学作品においてはそれが遣唐使のイメージに強く結び付いたということがわかった。また、近世における七絃琴の受容の地方での広がりについて、米子市を事例に確認することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：七絃琴 遣唐使 うつほ物語 源氏物語 山陰歴史館 留学生 音楽 米子

## 1. 研究開始当初の背景

『うつほ物語』や『源氏物語』などの日本古典文学作品に七絃琴が多く表わされるのに比して、その具体的なあり様が解明されていなかったため、基礎的な調査の必要性があった。

## 2. 研究の目的

古典文学作品における七絃琴の描写のあり方を明らかにし、また七絃琴の演奏を復元

することが本研究の目的であった。地方における七絃琴の受容についても具体的に明らかにしていきたいと考えた。

## 3. 研究の方法

七絃琴の楽曲を復元するため、その録音を行った。また中世初期までの「琴」の用例についての悉皆調査を行った。加えて、米子市立山陰歴史館所蔵の七絃琴に関わる調査を行った。

#### 4. 研究成果

古代における七絃琴の受容の歴史的なあり様と文学テキスト上の展開を克明に追うことができた。遣唐使によってどのように楽器や楽技を将来して来たのかを特に意識し、具体的には「七絃琴の古代での受容は極めて限定的であったが、それがイメージとして遣唐使に強く結び付いた」という結論を得た。また、近世における七絃琴の受容についても、資料発掘を通してよりよく見えてくる事例を、主に米子市などで確認した。

本研究の大きな課題は、琴（七絃琴）に関わる中世初期までの叙述を全面的に調査し、挙出することにあつた。これにより、この時期までの琴に関する叙述のおおよそが把握可能になるに違いない。

おそらく「なぜ琴なのか？」という疑問が湧いてくるであろう。伝統楽器は数多くあり、そのそれぞれが日本文学のテキストに多く表現されていることは自明のことでもある。これに対する答えは決して単純ではないが、琴という楽器が他の楽器とは違う破格の待遇を受けていた時期があつたということ、そのことに注目したい。『源氏物語』に「琴の音を離れては、何ごとをか物をととのへ知るべとはせむ（若菜下巻）」とあるのは、楽器界での琴の中心性を表している。また、平安時代までの漢詩文には多く「琴」字が表されている。しかしながら、そのわりには琴というものが、古典テキスト全体としてどのように表されているか知らされることはなかった。もちろん、個別のテキストにおける先行研究は見逃すことはできないだろう。ただし、テキスト群上の全体像を見通す研究は現在まで皆無であつたことはここに記さざるを得ない。本冊子の意図は、まさしくこうした状況の打開にこそある。

この度の研究で問題になつたのは、「琴」表記が果たして「七絃琴」を指すかという根本的な疑問であつた。それは、テキストの制作時代によって様相が大きく変化するし、物語・和歌・漢詩などといったジャンルによっても相違しよう。加えて、同時代同ジャンルにおいても、大陸（中国）に対する関心度によって変化するのではないかという印象を持った。「琴」が「きん」なのか「こと」なのか、「こと」であればそこには箏や琵琶も含まれるのか、このような疑念に一つ一つ向き合わねばならず、それはそれなりの苦勞を要したものである。

また、各テキストに表される「琴」が、実物を意味する琴なのか、それとも故事等の引用としての表記なのか、また漢詩など修辭的要素の高い表記なのか、様々なケースに遭遇したことも事実である。おそらく、それは単なる「モノ」ではなく、楽器の持つ独特の付加価値や付加文脈（コンテキスト）故の事態であつたのだと思う。「琴」と「松風」の関係のごとく、ほぼ完全に「詩的言語」の枠組みとしてしか成り立ち得ないケースもかなり多かつた。パロールとエクリチュールではないが、楽器自体から生じる「音」や楽器自体の形状である「モノ」と、漢詩や和歌、物語などに見られる文学的感覚世界における「文（テキスト）」の二つのあり方が、「琴」には見出すことができる。「音・モノ」（実存）と「文（テキスト）」（虚構）が両義的に表出される「琴」の表記・表現からは、一定の文学理論の醸成も不可能ではない。時代を越え、ジャンルを越え、地域を越えて「語られる琴」を検証することは、文学研究上の新たな理論を見出す絶好の機会であるとも言える。

さて、日本文学の側からの七絃琴研究は、主に『源氏物語』の研究から深化してきたといふことができる。しかしながら、『源氏物

語』における七絃琴が古代日本における標準的なあり様を示しているとは、どうやら言えないことがわかりつつある。近年、『源氏物語』の七絃琴は「皇統」や「王権」を象徴するものとして考えられ、それはおおよその共通理解として受け止められているようである。しかし、他の古代文学作品や歴史資料においては、必ずしも七絃琴がこうした「皇統」や「王権」に深く関わるものとして扱われているわけではないのである。それでも、『源氏物語』には『源氏物語』の論理があると言うこともできるのかも知れない。だが、『源氏物語』の研究から醸成された「七絃琴＝王権」論を使って、再び『源氏物語』論を展開するというのであれば、それは同義反復以外の何ものでもない。『源氏物語』に描かれていることと、平安時代の実態的なあり様の「ずれ」をいかに理解し、そのことによつてどのような視野が開けていくのか、こちらの方が重要なことに私には思えるのである。

山田孝雄の名著『源氏物語之音楽』が公刊されたのが一九三四年のことである。この著作に至るまでに、荻生徂徠（一六六六～一七二八）の『琴学大意抄』や浦上玉堂（一七四五～一八二〇）の『玉堂雜記』が書かれている。山田孝雄は江戸時代の琴学を参考にしつつ、『源氏物語之音楽』を記したのである。実はこうした研究史の整備はあまり行われていない。例えば、若菜下巻の女楽にある「五六はら」「五六のはち」の本文の問題は、既に荻生徂徠によって考察が加えられている。『琴学大意抄』には「源氏物語に五六のはらと云へるは、五六の徽にて、この手（發刺）をすることなり。琴、世に廢れたるゆへ、このはらと云ことを知らずして、源氏の抄物に、或は五六のばちと云、或は破等とかきたるは誤なり。」とある。後世の再説にもかかわらず、いまだ定説とはなっていない。熊沢蕃山

（一六一九～一六九一）の『源氏外伝』なども踏まえつつ、今後は江戸琴学の研究を意欲した考察が必要となるであろう。なぜなら、この時代、比較的頻繁に七絃琴が演奏されたという歴史的な背景が確実に存在するからである。あの「唐心」嫌いの宣長ですら七絃琴について述べざるを得なかったのである（『源氏物語玉の小櫛』須磨巻など）。

なお、本研究は、中丸貴史（学習院大学大学院）、坪美奈子（和洋女子大学准教授）、岡部明日香（中央学院大学講師）、木下綾子（明治大学専任助手）、笹生美貴子（日本大学大学院）、正道寺康子（聖徳大学短期大学部准教授）、永井崇大（日本大学大学院）、伏見无家（鎌倉琴社主宰）、皆川雅樹（専修大学附属高等学校専任講師）各氏による多大なる支援によるものである。人文科学系統の研究においては極めて稀な、作業自体からの共同研究の方式を私たちは今回選ぶこととした。共同研究の難しさはあちらこちらで聞くこともあるが、各調査者が相互に刺激を受けることも多々あり、その意味では大変有効な研究スタイルになったと思う。こうしてできあがった私たちの調査結果が、学界の発展に少しでも寄与することを望むばかりである。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 原豊二、七絃琴の響き—幻の絃楽器の魅力—、山陰中央新報、3.17 日付、pp13、2007、査読無
- ② 原豊二、江戸時代の雅な米子 奇才・田代元春の人生とは？、新修米子市史だより、25、pp4-5、2007、査読無
- ③ 原豊二、山陰歴史館所蔵七絃琴に関わる近世・近代の〈学〉的体系の考察—国学・漢学・琴学の横断をめぐって—、物

語研究、8、pp38-43、2008、査読無

〔学会発表〕（計7件）

- ① 原豊二、源氏物語と王朝文化～琴の音に寄せて～、山陰歴史館講演会、2007
- ② 原豊二、山陰歴史館所蔵七絃琴に関わる近世・近代の〈学〉的体系の考察—国学・漢学・琴学の横断をめぐって—、物語研究会大会、2007
- ③ 原豊二、田代元春制作七絃琴に関わる〈知の集積・ネットワーク〉について、鳥取地域史研究会、2007
- ④ 原豊二、山陰歴史館所蔵七絃琴—浦上玉堂、田代元春、杵村源次郎をめぐって—、第2回山陰研究センター講演会、2008
- ⑤ 原豊二、山陰歴史館の七絃琴、伯耆文化研究会、2009
- ⑥ 原豊二、遣唐留学生像の受容と変遷～特に琴を意識しつつ～、第2回東アジア世界史研究センター研究会、2009
- ⑦ 原豊二、遣唐使と七絃琴—歴史と文学の間から—、「源氏物語と七絃琴」京都シンポジウム、2009

〔図書〕（計3件）

- ① 原豊二、岡部明日香、正道寺康子、日本琴學、ミュージックスケイプ、2007
- ② 原豊二、中丸貴史、日本文学における琴学史の基礎的研究《資料編》、米子高専原豊二研究室、2008
- ③ 原豊二、日本文学における琴学史の基礎的研究《論考編》、米子高専原豊二研究室、2009

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.geocities.co.jp/Berkeley/564>

[9/](#)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

原 豊二 (HARA TOYOJI)

米子工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：50311064